

# 「自分が安全を感じること」と 「公平で、不当な暴力や権力がないこと」とは 必ずしも同じではありません

ひびの まこと <https://barairo.net/>

「社会運動の内部における暴力/権力」と言う  
と、何を思い浮かべますか？

自分が他のメンバーからされた嫌なことを  
皆に話したら「それは気にしすぎ」「個人的  
なことを持ち込まないで」と取り合われな  
かった時に感じた感覚ですか。それとも、そ  
の場に「居させてもらう」ために、いつの間  
にか「その場のノリ」に合わせてしまってい  
る自分に気付いた時ですか。「やっぱり女は  
なめられる」と思い知らされた時ですか。自  
分が暴力を振るわれている時に「面倒なこと  
には関わりたくない」という顔を友達にされ  
た時ですか。「この問題に関わるとヤバイ」  
と直感的に気が付いて、友人から相談されて  
も聞かなかったフリをした自分がある時で  
すか。

女子の話が軽視され無視され続けてきたこ  
との裏返しとして、今度は女子が「私が傷つ  
いた」と言えば誰もそれに反論できないよう  
な雰囲気を作ることができた時のことでは  
ないか？いつもは無視されている自分の意見が採  
用された時ですか？自分の嫌いなアイツが場  
に来なくなった時ですか？

自分がクレームを言ってもあっさり無視さ  
れたのに、「有力者」やその友人が同じ事を  
言ったら、急にみんなが「そうだ、そうだ」  
と言い始めた時ですか。

「この問題」について扱うのが難しく、そ  
して面白いのは、「この問題」が、「私たち  
が今いるこの場所」の権力（ヘゲモニー）の  
配置の問題に直接関わるから一言い換えると

「この場が誰の場所か（誰にとっての安全  
か）」という問題だからです。その場で何が  
暗黙の了解とされているか、を暴いてしま  
うからです。それは、「ワタシ」と「あなた」  
とが、どういう力関係の元で人間関係を持  
つのか、という話にもなります。そして更に、  
その「場」が誰の労力と支払いによって成立  
しているのか、という問題にも、直接繋が  
ります。

はっきり言うと、その場の多数派にと  
ってメリットのある告発は、聞き入れられ  
ます。その場を創ることに労力を払ってい  
る人や、居なくなると困るような人から  
のクレームも、もちろん聞き入れやすい。  
だって、その人たちが居ないとみんなが  
場からメリットを受け取れないから。

しかし、その場の多くの人にとって面倒  
な告発は、忌避されがち。何よりその場  
の中心メンバーに対する批判は、言いに  
くいし、他のメンバーに言っても聞き流  
されやすい。それは何故なのか？「その  
中心メンバーに権力があるから」と答  
えるのは簡単だ。しかし実際に問題を表  
面化させてみた時に気が付くことは「そ  
の権力を支えているのは自分自身だ」と  
いうこと。自分とその中心メンバーとは  
確かに権力において対等ではない。しか  
し同時に、場を維持するために引き受  
けているコストとリスクも、対等でない  
場合が多い。だからこそ批判の声を上  
げると「では誰が場を維持するのか」と  
言われるし、誰もそのコスト

を引き受けたくないからこそ中心メンバーへの批判は聞き流される。

よりましな場を創るために、「ガイドラインを作る」ということも、私も何度かしてきました(\*注)。しかしそれも結局、その場にいる多数派の利害に反しない方向で告発がされている時には有効に機能する(当たり前です)のですが、その場の多数派や場の有力者の利害に反する告発があった場合は、結構簡単に忘れ去られます。

そうなることがほとんどだからこそ、結局多くの場合は、自分がその場での多数派の側になることによって、もしくはその場の有力者と個人的に親しくなることで、自分の身を守ろうとしがち。しかしそれでは、自分は安全でも、ハラスメントが起きる仕組みは何一つ変わっていません。

あなたは、いま誰かに対して「この人の話をちゃんと取り合う必要はない」というような態度をとっていませんか？特に、場のみんなが「その人の話は聞く必要がない」という雰囲気になっている時が、一番要注意です。自分とは意見が正反対の人に対して、自分の意見を直接伝え、話し合おうとしていますか？自分を弱者に相手を強者に一方的に仕立て上げ、それを口実にして話し合いを拒否したり、誰かを排除したりしていませんか？

実際には、自分がどこかに居心地良くいることが出来たり、安全だと感じていたり、自分が面倒だと思う話に付き合わないで済んでいたら、おそらくあなたはその場の「鈍感なマジョリティー」の側、無自覚にハラスメントをする側にいる可能性が高いです。

「自分が安全を感じる事が出来ること」と、「その場が皆に公平で、不当な暴力や権力がないこと」とは必ずしも同じではありません。前者を追求するのであれば、自分以外の人がある場でハラスメントや暴力を受けうる構造自体は温存されてしまいかねません。後者を求めるのであれば、私たちは、「みんなにとって、より安全な場所」を創るため

に、一生コストを支払い続けたいといけません。「みんなの場」を維持するためのコストも「みんな」で負担する必要があります。それはおそらく「世間の中でただツツウに暮らすこと」よりは大変なことでしょう。

どちらを選ぶかは、あなた次第です。

(\*注) ガイドラインの例

・ストップ性暴力キャンペーン

<http://barairo.net/special/sexual-violence/2003-5/>

・「みんな」にとって、楽しい映画祭にするために

[http://kansai-qff.org/public\\_comment/minna/](http://kansai-qff.org/public_comment/minna/)

【参考資料】

●プロジェクトPが主催したカフエパーティー「へなへないと」において、1998年に性的な暴力があったことについて

<http://projectQ.info/modules/henahena/1998.php>

●「セックスワークの非犯罪化を要求するグループ UNIDOS」の構成員であったブブさんを、京都★ヘンナニジイロ祭のゲストとして迎えることについて

<http://barairo.net/works/?p=61>

●たとえそこがどこであっても

<http://barairo.net/works/?p=30>